

る風刺など大仰な社会的なテーマは影をひそめ、薄っぺらなパロディを多用したドタバタ映画だった。そもそもマイケル・ホイ演じる主人公を指すミスター・ブーとは、マイケル・ホイが当時の高木ブーに容姿が似ていたこととタイトルに濁点を入れるとヒットするとのジンクスにあやかって日本版のみにつけられた。マイケル・ホイの役どころは、日本公開1作目である「Mr. Boot ミスター・ブー」では探偵社の所長ウォン・ヨクシー（黄若思）、2作目の「Mr. Boot インベーター作戦」ではテレビタレントのシップ・ジーマン（薛志文）、3作目の「Mr. Boot ギャンブル大将」では刑務所仲間のブン兄貴（鄧國文）、そして「新 Mr. Boot アヒルの警備保障」では警備会社のチャウ・サイチョン（周世昌）隊長で、いずれもミスター・ブーという名前ではない。配給した東宝東和がマイケル・ホイの主演映画とだけでシリーズとして公開したのは、したたかに宣伝するためだけだった。当時、「Mr. Boot」「新 Mr. Boot」シリーズに毎回映画館に足を運んだ観客には騙されているような違和感はないのだったのだろうか。

「新 Mr. Boot 鉄板焼」は、東京で11月2日に公開された後、福岡では福岡東宝で11月30日から12月13日まで上映された。『サンデー・ラバース』との2本立てだった。『サンデー・ラバース』は、1980（昭和55）年に製作されたイタリアとフランスの合作映画だった。原題はイタリア語の「seduttori della domenica」（日曜日の誘惑の意）でフランス語題は「Les Seducteurs」（誘惑者たちの意）、英語題は「Sunday Lovers」（日曜日の恋人たちの意）で、邦題は英語題をカタカナにして「サンデー・ラバース」とした。後にビデオ（VHS）が発売されたときは、副題に「...というわ



けで恋の策略おしえます!!」がついていた。4話のオムニバス映画で4人の監督がそれぞれロンドン、パリ、ロサンゼルス、ローマでロケーション撮影し、世界の4都市を舞台に中年男性の恋をそれぞれの独立したストーリーで描いている。

ところで、1985（昭和60）年のジャッキー・チェン主演映画の中洲の映画館での九州初公開は以下のとおりだった。

- ①「香港発活劇エクスプレス 大福星」 福岡東映、8月16日～9月13日
- ②「プロテクター」シネマ1、6月22日～8月2日 ニュー大洋、6月22日～7月5日
- ③「ファースト・ミッション」福岡松竹、9月14日～10月25日

さらに、この年4本目のジャッキー・チェン主演映画が年末に公開された。ゴールデン・ハーベスト（嘉禾電影有限公司）製作の香港映画「ポリス・ストーリー 香港国際警察（1985）」で、ジャッキー・チェンは主演だけでなく、監督・脚本・武術指導を兼ねていた。原題は「警察故事」で、邦題は英語題の「Police Story」をカタカナにし、「香港国際警察」を加えて「ポリス・ストーリー 香港国際警察」とした。東宝東和が配給して12月14日から全国公開さ

れた。福岡ではシネマ1で12月14日から1月24日まで、ニュー大洋で12月14日から2月1日まで上映された。興行収入19億円で日本でも大ヒットした。

「ポリス・ストーリー 香港国際警察」は「プロジェクトA」と並びジャッキー・チェンの代表作とされ、シリーズ化されて「ポリス・ストーリー 2 九龍の眼」（1988）「ポリス・ストーリー 3」（1989）「ファイナル・プロジェクト」（1996）の3本が製作されている。

「ポリス・ストーリー 香港国際警察」のストーリー。『香港警察のチェン・カーク刑事』『ポリス・ストーリー 香港国際警察』のストーリー。『香港警察のチェン・カーク刑事（ジャッキー・チェン）は香港最大の麻薬組織を摘発するため山奥のスラム街で張り込み、チュウの女秘書サリナを逮捕するが、その際にチュウに逃げられてしまった。チェン刑事は、チュウ一味にジャックされた路線バスを必死に追いかけて、何とかチュウも逮捕することに成功した。ところが、サリナが検察側証人になるという司法取引が結ばれて釈放される。チェン刑事は、サリナの身辺警護を命じられ、出廷を妨害しようとするチュウの部下たちと激しい闘いを繰り広げることとなる...。』次号に続く

＝ 図版は「新 Mr. Boot 鉄板焼」＝

博多とジアの映画 115

松 浦 仁

「Mr. Boo」というタイトルで公開した。マイケル・ホイが脚本・監督・主演、実兄弟のサミエル・ホイとリック・ホイが準主役として出演する香港を舞台とするナンセンス・コメディだった。

ゴールデン・ハーベストは、同じくマイケル・ホイが脚本・監督・主演、サミエル・ホイとリック・ホイが準主役として出演する「鬼馬雙星」(1974)「天才與白痴」(1975)「半斤八兩」(1976)「賣身契」(1978)を製作して、いずれも香港人のしたたかさやたくましさ、さらに香港が直面する東西文化の軋轢を警察、政財界、黒社会などの権力を庶民の視点から嘲笑し社会風刺した作風ではあるが、ホイ3兄弟の演じる役柄は似通っているものの各作品はそれぞれ独立した企画であり、題名にも設定にも共通点はなかった。

1985(昭和60)年11月「新Mr. Boo 鉄板焼」(1984)が日本で公開された。「新Mr. Boo」の第2弾であるが、そもそも「Mr. Boo」新Mr. Boo」というタイトルでシリーズ化したのは日本での配給元である東宝東和だった。東宝東和は、1979(昭和54)年に香港のゴールデン・ハーベスト(嘉禾電影有限公司)が製作した半斤八兩」(1976)を「Mr. Boo: ミスタ

の「天才與白痴」は劇場公開されずに2013(平成25)年に「Mr. Boo: 天才とおバカ」というタイトルでブルーレイBoxが発売された。

少しややこしいので整理すると、ゴールデン・ハーベストが1974(昭和59)年に「鬼馬雙星」(1975(昭和60)年に「天才與白痴」、1976年(昭和51)年に「半斤八兩」、1978(昭和53)年に「賣身契」を1年ごとに製作し、日本では東宝東和が配給して1979(昭和54)年2月に「半斤八兩」を「Mr. Boo: ミスタ・プー」、同年5月に「賣身契」を「Mr. Boo: インベーター作戦」、同年12月に「鬼馬雙星」を「Mr. Boo: キャンブル大将」というタイトルでシリーズとして数カ月ごとに続けて公開した。そして4作目の「賣身契」の製作から3年後の1981(昭和56)年、ゴールデン・ハーベストはマイケル・ホイが脚本・監督・主演、サミエル・ホイとリック・ホイが準主役として出演する、前4作と同じ路線のナンセンス・コメディ映画「摩登保鏢」を製作した。

日本の配給元である東宝東和は1982(昭和57)に「摩登保鏢」を「Mr. Boo」のシリーズとして日本で公開するのだが、前作の公開から数年がたったので冠に「新」をつけて「新Mr. Boo: アヒルの警備保障」という邦題

にしたのだ。さらに、「摩登保」から3年後の1984(昭和59)年にマイケル・ホイが脚本・監督・主演の「鐵板焼」が製作された。製作はゴールデン・ハーベストではなくパラゴン・フィルム(嘉峰電影有限公司)だった(ただし、香港及び海外の配給業務は4作と同じゴールデン・ハーベストが担当)。

1985(昭和60)年11月、「鐵板焼」が東宝東和の配給で「新Mr. Boo: 鉄板焼」(1984)というタイトルにして日本で公開された。主演は監督でもあるマイケル・ホイだが、「Mr. Boo」新Mr. Boo」で準主役だったサミエル・ホイとリック・ホイは出演していなかった。

「新Mr. Boo: 鉄板焼」のストーリー。「ジョニー(マイケル・ホイ)は、中国本土から103歳の父とともに逃げてきて鉄板焼店のシェフをしている。妻は浮気に敏感な恐妻家で、義父はハンティングが趣味で猟銃を振り回している。ジョニーは店に来た美人のシシーに惚れ、涙ぐましい浮気作戦を繰り広げフィリピンの島に浮気旅行に出かける計画を立てるが、かぎつけた妻と義父も同行することになる。」

「新Mr. Boo: 鉄板焼」は「Mr. Boo」シリーズに共通した香港人のしたたかさや香港が直面する社会の矛盾を嘲笑す